「トイレで手コキ強要」「おじさんからイタズラ」etc.
法改正で被害事例が続々と明らかに！

誰にも言えない「男の性被害」実態

これまで目の目を見なかった男性の性被害が、法改正やジャニーズ性加害問題がきっかけとなり、社会の一大関心事となった。しかし、そこには数々の難問が潜んでいた

「男が被害に遭うはずがない」今も残る社会の無理解と偏見

6月16日に刑法が改正され、強制性交等罪と準強制性交等罪を統合した「不同意性交等罪」が新たにできた。性交同意年齢も13歳から16歳へと引き上げられ、「意思を表すいとまがない」「経済的・社会的地位の影響」などの条件を具体的に挙げ、同意のない性行為が処罰対象になることが明示された。もちろん、これには男性の被害も含まれる。

男性の性被害が語られるようになったのは、'17年の刑法改正からだ。それまで男性の性被害は空白地帯だった。性的少数者（LGBTQ）への暴力根絶を目指す任意団体・ブロークンレインボージャパン代表の岡田実穂氏はその理由をこう説明する。

「強姦罪は110年以上も前に作られた法律で、家父長制度が基になっており、〝家〟の所有物である女性が犯されることで『家系の中に別の血が入ってきてしまう』という考えがあった。男性への性暴力を罰するという発想自体がなかったのです」

それが刑法性犯罪規定の改正でようやく変わったのだ。性被害問題に詳しい、弁護士でみずき法律事務所代表の川本瑞紀氏が解説する。

「'17年刑法改正で、強姦罪が強制性交等罪に変更となり、口腔性交と肛門性交が被害として扱われることになった。刑法177条の規定によって、男性被害者が成立するようになりました」

今年に入り、ジャニーズ事務所の元所属タレントが相次いで性被害を公表したことの影響も大きい。今、かつてないほど男性の性的被害に注目が集まっている。

川本氏の感覚としても、子供の被害を訴える親が増えたという。今回、小誌にも生々しい被害体験が複数寄せられ、見ず知らずの女性に童貞を奪われたり、仕事の関係者の男性から口淫されたりといったケースが告白された。

加害者には男性も女性もいるが、両者に明確な違いがあ

男性は全体の2～3%

強制性交等の認知件数
年間1300～1400件
（'18年以降）

うち男性の被害
50～70件

加害者との関係	
1位	通っていた（いる）学校の関係者
2位	まったく知らない人
3位	職場の関係者
3位	交際相手・元交際相手

※警察庁や内閣府、時事通信社の調査を参考に編集部作成

CASE2

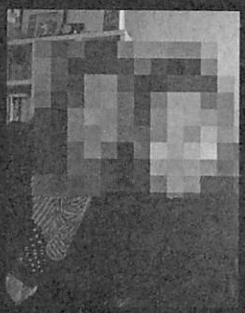
塾帰りにトイレで男の陰部を触らされた

被害者 B君(当時11歳)　加害者 40~50代のおじさん

「あれは3年前。当時小学5年生だった長男が号泣しながら帰ってきたんです。めったに泣かないので、驚いて尋ねたところ、『都内T駅のトイレで知らないおじさんから性器を見せられ、触らされた』と言うのです」

こう証言するのはB君の母。B君は当時ボブスタイルがよく似合う、優しい雰囲気の男の子。中学受験のため電車で通塾しており、事件はその帰りに起きた。相手は〝普通のおじさん〟で、不信感を抱かなかったようだ。

「駅のトイレで、おじさんから『ちょっと気分が悪いから助けて』と個室に連れ込まれたそうです。『触らされた以上のことはされなかったの？』と確認したら、『衣服の上から体をベタベタと撫でられた』と言いました。加害者は自分で触って射精したようです。狭い空間に2人きりで、性器を間近で見せられて怖かっただろうなと思いました」



B君の母はママ友に「男児でも性的被害に遭う」とアドバイスしているという

さらにB君は電車の中でもたびたび痴漢に遭っていたことも告白。今後の成長にどんな影響を及ぼすのか母は心配している。

CASE1

某芸能人との食事中にいきなり口淫された！

被害者 Aさん(27歳)　加害者 40代の芸能人(男)

芸能人からの性被害を告白してくれたAさん。きゃしゃで小柄な体に、竹野内豊に似た顔立ちの美男子だ。

「高校中退後、20代半ばまでミュージシャンになる夢を追いかけていました。でも、パッとしなくて諦めたんです。そんなときに拾ってくれたのが芸能人のXさんでした。感謝はしているのですが……」

AさんはXがオープンする店のスタッフとして、複数での食事会に誘われた。その個室で事件は起きた。

「Xは『A君ってイケメンだよね』と近寄ってきて、『ランチの時間だね。僕もランチしたいなあ。A君のを食べさせて』と言いながら、僕のズボンを下ろし始めた」

AさんはXのことを尊敬していただけに、思い出すたびに悲しい気持ちになるという

周囲も冗談だと笑っていたが、なんとここでXはフェラチオを始めたというのだ。

「びっくりして拒否したら『ごめんごめん』と笑いながらやめました、笑い事じゃねえよって気持ちですよ。ただ、恩があるし、失礼な態度も取れないですよね。どうするのが正解だったのか今でもわかりません」

不同意性交罪の審議に参考人として証言した、性教育の発信を続けるタレントのSHELLYさん。彼女の訴えが多くの政治家を動かした

る。加害者の治療に取り組む「性障害専門医療センター（SOMEC）」代表理事の福井裕輝氏は指摘する。

「男性の場合は、単純に性的嗜好が子供に向かう傾向が強い。子供であればすべてがターゲットになりうるので、対象は不特定多数です。ところが女性は恋愛に似た感情から発展するので、他の男にはまるで興味がないということが多いように思います」

被害者が、加害者になってしまうケースも少なくない。福井氏は続ける。

「海外では加害者の8割以上が幼少期に、性的虐待を含む

肉体的な虐待やネグレクト（育児放棄）などの被害を受けているというデータが出ています。日本でも似たような傾向があり、当センターに来る患者の約4割に性的被害を受けた経験があります」

実態が見えにくい男性の性被害

被害者に目を転じると、内閣府男女共同参画局の報告書（'22年）によれば、16～24歳の男性の5・1%が身体接触を伴う性暴力被害に遭っている。女性の8・7%よりは低いものの、一定数が被害に遭っているのだ。言葉による性暴力被害に遭った男性は、11・2%に上る。

警察庁によれば、'18年以降、強制性交等の認知件数は年間1300～1400件に上るが、うち男性の被害は50～70件。だが、これは氷山の一角にすぎない。

「弱さを認めたくない『ウィークネス・フォビア』（弱者嫌悪）を持つ男性は少なくない。被害に遭った自分や、負けてしまった自分を受け入れられないのは、男性のほうが強いのです」（川本氏）

かなりの時間を経てから性被害に遭っていたと気づく男性も多い。心理カウンセラーの山口修喜氏は指摘する。

「12歳で女性から性的被害を受けたというある男性は、17歳頃になって女性に対してイライラするようになり、20歳頃になって、ようやくあれが性暴力だったのだと気づいたと話していました」

また、男性被害者は性的混乱をきたすことがあるという。

「例えば10歳前後の少年がおじさんから性的虐待を受けると、興奮を感じることもあるので、頭では女性とつき合うものだと思っていても、体が男性を求めるというように混乱することがあります。性というものは本来、自然なかたちで探求していくものですが、発達の段階で性的虐待を受けると、それを歪められてしまうのです」（山口氏）

軽く見てはいけない性的トラウマ

男性の性被害の中でも特に顕在化しにくいのが、LGBTQの被害者だ。前出の岡田氏は、相談する窓口も充実していないと言う。

CASE3 レイプされたあげく、お金もカツアゲされた

被害者 Cさん（当時18歳）　加害者 30～40代のおばさん

「かなり昔の話で被害と言えるのかどうか」と前置きしながら話してくれたのは、Cさん（33歳）だ。

「高校3年生の冬休み。お年玉で服を買いに新宿に出かけたんです。西武新宿駅から丸井方面に歩いていたところ、知らないおばさんに『何しに来たの？』と話しかけられ、手を掴まれた。『いくら持ってる？』と言われ、素直に2万円と答えてしまったんです」

すると女性は「じゃあ、お姉さんといいことしよう」とCさんの手を掴み、強引にラブホテルに連れ込まれた。Cさんは当時、彼女もおらず気の弱い童貞だった。

「逆ナンかと思い、嫌だったんですが強く拒絶することもできず、服を脱がされ、フェラチオをされました。元気盛りなので当然すぐ勃ちますよ。その後、上になって挿れてきたので、すぐ発射しちゃいました」

相手の女性はやや派手な服装だったため、風俗嬢だったのではと回想するが……

しかし、行為が終わると「じゃ、2万円ね」と言われ、お金を巻き上げられてしまった。

「初体験の相手がおばさんなんて、とても残念ですよ……」

CASE4 複数の女子生徒に、トイレで凌辱された

被害者 Dさん（当時13歳）　加害者 5人の女子中学生

中学生時代の性被害を打ち明けてくれたのは、藤原竜也似で小柄なDさん。男女共学の難関私立中に入学したが、あることがきっかけでいじめられるようになった。

「母はシングルマザーで、過去に風俗で働いていたことがあるんです。そのことを友人に話したら広まってしまい、『お前が来るような学校じゃない』とイジメを受けるように。当時は口ベタで黙るしかなかったんです……」

イジメはエスカレート。そしてある時、5人の女子生徒にトイレに連れ込まれ、ズボンを無理やり下ろされ、手で下半身を刺激されたという。

「もみくちゃにされながらも勃ってしまい、射精までしてしまった。とても嫌だったけど、気持ちよかったのかな。多分、気持ちよかったんです」

Dさんにとってはイジメの延長線上にある、あまり思い出したくない嫌な経験だった

Dさんはこの体験をうまく受け入れられず、今でも自分の性を持て余しているという。

「普通の恋愛では満足できず、いじめられたいという願望が消えない。SMクラブに行ってしまう。自分が嫌になります」

男性被害者への社会的偏見「レイプ神話」とは

① 男性が性被害に遭うはずがない
② 性的な被害に遭う男性は同性愛者だ
③ 女性が性的な加害行為をするはずがない
④ 性的な被害を受けることでその男性は後にゲイになる
⑤ 性的虐待を受けた男児は自らも性的虐待を行う男性に成長する
⑥ 性的な被害を受ける男性は、男らしさに問題がある
⑦ 男性は性的被害に遭いそうになっても抵抗できるはずだ
⑧ 抵抗しない男性はその行為を望んでいる
⑨ 勃起・射精などの性的反応が起こったら同意していたといえる

出典:「性犯罪に関する刑事法検討会ヒアリング配布資料」(岩崎直子、Struckman-Johnson、Turchik & Edwards)

「行政の相談事業は対象を明示していないことが多く、マイノリティや男性のサバイバー（性暴力を生き抜いた人）は、自分が相談してもいいのか不安に思うのです。性被害は若い女性が受けるものだと認識している人が多いので、差別が助長されるのではないかと心配するサバイバーもいます。相談機関で性的指向の話ばかり聞かれて、具体的な話ができなかったという声もあった」

性的少数者に限らず、男性被害者にはまだまだ偏見の目がある。こうした誤った見方を「レイプ神話」（左の表を参照）と言うが、それゆえに男性は、性被害に遭うと大きなショックを受けるのだ。

「レイプに遭う可能性がゼロではないと思って生きている女性と、そういう発想がもともと頭にない男性では、リスクに対する構えに大きな違いがある。男性は人生に織り込まれていないリスクを突然、背負わされるのです」（川本氏）

では、実際に被害に遭った場合はどうすればいいのか。前出の山口氏は、迷わず専門家に相談すべきだと言う。

「過去の被害でも軽く見てはいけません。一度性的トラウマを受けたら、何もなかったことにはできないのです。人に語ることで回復することは決してないので、それ以外の部分に目を向け、少しずつトラウマを解消していくことが必要です」

前出の岡田氏は最後にこう強調する。

「被害の重い、軽いではなく、被害に遭った誰もが助けられる社会であることが大切です」

性別に関係なく、まずは被害を減らすことが重要だ。

支援団体代表
岡田実穂氏

LGBTQ+の性暴力被害者やサバイバーの支援団体・Broken Rainbow-JapanやNGO・レイプクライシス・ネットワークの代表を務める

心理カウンセラー
山口修喜氏

カナダの州公認心理カウンセラーを経て、男性専門のカウンセリング「オフィスPomu」代表。2500人以上にトラウマセラピーを行う

弁護士
川本瑞紀氏

第一東京弁護士会犯罪被害者に関する委員会・委員。犯罪被害者支援弁護士フォーラム会員。性暴力救援センター・東京理事

元ジャニーズ「児童虐待防止法」改正を訴えた理由

ジャニー喜多川氏による性加害を巡っては、多くの元所属タレントが告発しているが、そのひとり、橋田康氏が取材に応じてくれた。ジャニーズJr.として活動していた1999年に性被害を受けた橋田氏はなぜ、告発したのか。

「ジャニーズ事務所は私にとって、すごく大切な場所。事務所が少しずつ弱っていくなかで、自分だったら違った結果をもたらせられるのではと考えました。ちょうど自分の会社を設立して新しいスタートを切ったばかりで、物事がいい方向に変わるのではないかと思ったからです」

反響は大きく、橋田氏は一定の手応えを感じている。

「多くのメディアが目を向けてくれるようになりました。性加害はタブーであり、パンドラの箱を開けてしまったわけですが、社会が見て見ぬふりをできない状態にしたことは、大きな一歩だった」

告発と並行して、子供たちを守るために「児童虐待防止法」の改正を訴えてきた。残念ながら先の国会では見送られたが、動くことに意義があったと橋田氏は言う。

「法改正も大事ですが、社会が変わることに意味があります。行動したことで、性被害を受けた方などたくさんの人からメッセージをいただき、少しは役に立ったのではないかと思っています。これで終わらせず、ちゃんと結果につなげていきたいです」

目指すのは、子供たちが安心して活躍できる健全なエンタメ業界を実現することだ。

「性加害の事実があったことを踏まえた上で、ジャニーズ事務所には、再発防止策をきちんと示して、歩き出してほしい。所属タレントやジュニアの子たち、これから入る子供たちが、何の不安もなく活動できる環境をつくることがゴールだと思っています。また、僕もエンタメの世界で今後も活躍することで、『声を上げても、こんなに楽しく元気に人に夢を与える仕事ができるんだ』ということを証明したい」

橋田氏の闘いは続く。

元ジャニーズJr.／俳優
橋田 康氏

PROFエンターテインメント代表。1998年にジャニーズ事務所に入所し、ジャニーズJr.としてKinKi KidsやV6のバックダンサーを務めた。13歳の時に性虐待に遭う。退所後は、舞台を中心に活躍

取材・文・撮影／中山美里（オフィスキング）　大橋史彦　山口晃平　宮 建行　写真／時事通信社　Shutterstock